三子撰文選

中村俊定文庫
文庫 18
405
1

李詩選

宮内省圖書寮

紅葉山文庫

李詩選序　　甘六味

今リ文選ハ世ト共ニ流行ス李の下ニ桃ハ
ク吾國の文章ト云ふ交際ニ用ヒ詩をとなへた
ハ味ふるつきあるいふ口と笑て笑ふ
その句ふの数つりて一文集といふりぬ
いて和漢の文学ふまれて西洋ハ上ふ

中村文定文庫

さのみ家元と尾張とをすまとりて
京の人あれいと和歌の一ことをとゝ解
せぬ京人とゝ日ゝ詠すゝんやうく京
とり撰もるも千つす屋敷の沙汰の穂さく
今や太平の和ゝ治る御恵のかゝき
時代とりさもも彼来てゝ新もる華表
さて狩舟ゝ梅ゝ〜〜京の初りとさるゝ

白雪高若ものゝ名さもるゝ文をとりてなぎ
むゝと俗ゝ〜の秋ゝもるゝ牛文をとりて筆体
まおのもゝ口をとゞゝ古とゝりしく〜面の海
さもも〜〜と面りゝん柳こゝ俗のこと俗
俗説を辨〜ゝ古ゝ牛人の仏ゝうゝ赤い蛍
しといゝるゝどゝの儀人の面おゝ式養とゝん
や文字の毒ゝ生涯とゝやゝる徒の京ゝ

文章をもてんぜんの業とす歟とぞんじ
さうたる三人書下の腹と翰〻相坂こと
祝ひ人い知る所の人いと考
えんてをいり魚い測よりおるまつと
はもてあるよう存ます

甘泉
甘泉

甘泉

李攀文選序

挿錦亭文櫻

宝永のもち兎う湖集ふ南の仏の内侍
文選成えるを彩家は攀錦と湖水の
ちなみにのもとより平原の第山五十名の星
あるもの〻海陸の文章孫孫その内り文櫻と
いひ文攀とも同字の文章に学ぶとなく〻
三十餘年ぶりを文花も五日の風
よ彩るを文章を教ふ十日の雨よりて光よ

太平とよ御ゆたけ作らんや相共に手を携へて遊ぶ
人多き中に武蔵の柳塘よ六味翁あり
世活機伎作くしよ我神風の恵て発渓あり
初のこ作りて考り是を和すこと生涯を彼
蓮社よあるいは六とを計る文選三ヨを編す
さかまて三人作よ共師を名翁すく渓や
見なる五年まく年の若きたすして渓ふすて
官職を第の研ふ第は墨と自ら也
世の第稿乃以上よりて作よ霞醤乃具と

化をんとす変よ初めてひろに渓よりて見成
えて書撰文選とい雅物多き初や昭太子の
文選の序少毎元文とつねるの誠なの〳〵臺と
して裏ひとう又深よ文選よりかの文撰文撰乃
赴と各の題の部とひらく共類〳〵とう勢あつ
ひとを文とえむの古法とくり作ると今は
文選の類とわきに一篇すく混雑をい
文選乃名は仮字なるを作るよ三ヨ作
文稿ひとう名よ其新よ選ふ及あまて変と

擬擬の体要とするもの一にして
二人なり文殊と普賢と俱に機象の言韻
自立なり文殊の文集（モンジュ）の通言より全篇
皆二子の詩合せ皆一一也

李擬文選序

有李崇桃溪

如絃管の発するとの文と比喜との義
と出基とを枕の中に如なる物を以て
喜一倍の八海よりの義乃物よりも
ふ言てなる物に比喜ふ文を枕の
天工の如を以て安備の乃を高め
治乱の異を稽て詩居邈の篇と

おくりて經世大業をこゝに立て
称す其作品のことゝ
風月を美し文雅
風流なるも此文筆にて表さるゝものなれ
唐土八指くゝ習日本のうちそ國を治うて
玉女の文藻より爲る人物なれ
通して書にかゝ之辛者也と云ふ人物なれ
手紙遠波とうの人風山の人も者なる
漢土文明の君子國なる長崎なるへ

ばやこゝ文章ハ儒仏の二典を法すして
正史実録を物語源氏枕冊にて此文の
枝葉なるハそれとも出典引くまゝ
なるゝ下ざ風のいとくゝ多くゝ和語
新しくゝ屋実は二国よりも別れ出山の
蛇の身生なる竹四うかゝりなる物をまる
こゝちやせんさるや桃李の笑ふ
山ばこのとうゝや梅よ文を学ぶ也者よ欲

よまもしらし波うつすまはあてゝ今の見給ふそ
めよ人のゆるさぬ文のるふ目まつ人へぬさもとゝ
ちへ
其夢をさてさて音のさまに拍子も見ひすゝへて
筆紙をあやとる句しん叔要稗の云ひしる
よるさ夕貝棚の下涼まつましめ晴れ
楽をあさ海の波しかんを情ハ愛性の国の
ゆめしにる仏へさやかゝてで樹枝も樊ず
嚴玉をも拾ハで舞云頼流井一義を説し

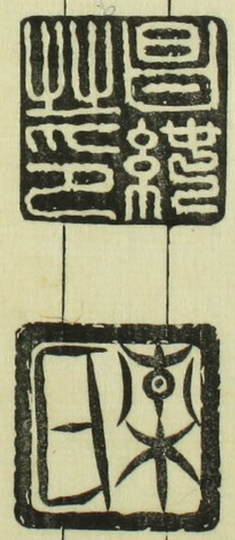
心をりて人紙代ふる大恒を嘉と情を嘉を
然しめ嘉をもこそ明ゆゝハ明月を
ゆり清風を味るさまゝ人ハ色なるよ
元ゝ月の長あり人ひとりの友恒をそ友誘の
時お為するゝ形ふ世交をして性を嘉ふ
のよ人ゝ少さまこあるて法ゝ為るやに
二子ハ文行をとゝへ句ゝ出樹しゆを
ゝを乃樹を為りれ色を世ぬてゝつゝふ

嵐の山なる碑を見出て碑をさすやうに二子いさゝかうたがひてかうやうのものゝ
ふくのを遊ぶ時はかりてまことにかぬなる
樵木よりてこの載の物ゝ人ゝ業を
同うせる妹ゝんとあるを力を用く
李下ふつゝじにて二子者の志誠あり
そをを撰りこゝろを捨てす法を惜める功
つれはてちよ文物の等誠とまく

李撰文選とゝもおつけめるゝ
うゝ人乃人のおもてのうふ衣のをりより
はしるおこれ相公のやゝ以へ海ふ
まゝ若て求むゝ文相さへ際て
山部の赤人のうゝいく晩ゝ詩作めん
さあて一本の紅はへ咲る色める誠やゝて
西山よ月傾て江村の春ま深ある
日時の変化ぞたゝなゝ相ふよ文人詩記

して去るにも貫通して通ずるとの文智
隔りて決して意を写す文の心所とする所也
まことにて序とすべし云

寛暦十一辛巳年仲秋吉辰



李撰文選目録

巻一之一

六味　桃溪
支橘　六味
蘆溪　支橘

巻之二

六味　桃溪
桃花　蘆風城

嘆ノ歳　交榻
送六味義之之茅野序　桃溪
送桃溪子序　支榻
与支榻子文　六味
赤水二史ノ編　〃
墨ノ舞　交榻
求二不一得　蘆溪
陸中ノ解　六味
石城秋日ノ詩　桃溪
老〃〃　支榻

風ノ城　交榻
漢沈ノ城　六味
三人作編ノ細　〃
蔵ノ稗　桃溪
結髪ノ編　六味
外内ノ城　蘆溪
十六歳ノ対　支榻
歳ノ論　〃
藩蛮ノ蔵　桃溪
大島芸藩ノ島ノ代　交榻
時務ノ説　桃溪

玄和譜　交櫻
雲ノ辞　六味
老之四
四季ノ辞　六味
酒ノ論　桃溪
解ノ論　六味
拷衣ノ曲　交櫻
卜宅ノ誄　桃溪
琴棊出画ノ文　六味
士農工商ノ弁　交櫻
松竹弱龍ノ頌　桃溪

記事

桃溪
交櫻

吾輩六味翁ノ文ヲ慕テ年頃筆硯ニ遊フニ賢不肖ノ文章既ニ
二百余編ニ及ブ爰ニ於テ往ル寅ノ年カ梓行ノ丁ヲ六翁ニ申セハ
翁モ元来此志ナキニシモアラス何レノ年ニカ竹尾ナルモノ此事ヲ企シ
ニ早ノモ地下ニ至リ其後門調人稀ナルニ今ヤニ子ノ大志アル社
老ノ身ノ幸ナレト彼畢鉢羅ニ三人篭リテ密ニ校訂スルヲ其子
ノ四明子サヘ是ヲ知ラス其妻ハカリハ鑑ノ穴ヨリ入テ翁ノ起臥
ヲ助ケヌルヽニ粗其選ノ意ヲ知レルノミ也物ハ隠レタルヨリ アラ
ハレタラン社トハイヘ偏ニアラハレタルヨリ隠レテ又アラハレタルモ面白カラン
トテ斯ハ秘蔵シケル也サルカ中ニ翁ハ例ノ病カチニテ物モ六借気
ナレハ適心ニメナル昼ニ夜ニ彼是ノ品ヲ定ルヽヽニ日ノ駒月ノ鼠モ止ラテ

卯ノ年モイマダ成ラス辰ノ春ハ此翁モ泉下ノ客トナリニケルニソ實ニ子ハ
筆ヲモ銜ヘキ思ヒナレヌ然ハアレト生前契リシ事ヲナノ言ヲ飡ム輩ナランヤ
ト已々不敏ヲ忘レテ此志ヲ繼ニ翁ノ雌黄ニモレタル物モアレハ是非イソレ
ト力定カメク待レトヨシヤ世中ノ浮草ナレハ強テ恥ヘキニモアラスト既ニ
木ニ鏤シトスルニ楊氏カ恐レシ四知モ去ルヿミテ四明子ノ耳トクモ此事ヲ
止メテ云クサイツ頃モ人知已ノ人々遺文ヲ不朽ニナスノ志アリテ文庫
搜シヲ乞ハレシヿアリ其志ノ切ナル吾身ニ於テ謝スヘキノ詞ナケレト
翁ハ生涯名利ヲイトヒテ隱逸ヲムネトシケルヽ蟻ノスサミノ書捨ノ世ニ
出ナンモ本意ナラシト固ノ辭シテ一ツノ文塚ニ封シヌ今此事モ思ヒトヽリ
テヨト頻ニ申サレケレ氏イカヽハセン彼在世ノ密約ヲヨシサラハ罪ハ吾ニ社蒙
ルヘケレト例ノ無分別ニ四明ノ意ヲノムキテ先世余章梓ニ彫リテモ翁ノ
墳前ニ備ヘ季氏カ志ヲ追フシカナリ

李撰文選卷之一目錄

一　春蝶ノ辭　古味
二　海鮫汁ノ辭　桃溪
三　灰吹ノ辭　文橘
四　蓼ノ蘊　古味
五　鼈ノ海　桃溪
六　猶ノ蔵　文橘

李撰文選巻之一

一 愛蝶辞　　六味

夢に荘子となるさめては夢は我にして荘子は荘子
なり荘子と夢と又異也されば比翼を設けて独り楽
しめる折ふしか今は連理の一枝をいけて見を悦ばしむる
ありさまをいつまでの命より俤うかん黄蝶やさらに来りて
まかきの葎遊ぶさま欲をかすべき風情はえんなる
なし情なきを見ん情をうつして閑を終するの佳趣を
恨らし思ふにさるや荘周が夢に蝶となりしも
周が蝶なるや蝶の周なるやしかけるとみえて蝶と

荘子の一篇を論じて云く昔者荘周夢に蝶となる
荘子の一篇を論じて云く昔者荘周夢に蝶となる
胡蝶の夢に人と成り変化して翩々たる
うるほしく楽しみて自ら適へり我れ是れ
胡蝶なるかを知らざるなり此れ
とうてハ況の海よりハ出て筆ハ筆架をたづねて
席上よりおりハ青山ハ夢や覚たるかいづれか
行ぬさるなるかを考るに荘子と論の奇なる
其文章の故なるかふかく動きこれを変じて思ひ
恵子の無を論ずるを荘子やく白をいとひて
蝶を化して自適と為たるかハ其蝶と
おれしく南華の文花の道をせハ春色おのづから

さかりのへりて絶くあるを化のよ人百世の栄辱
と忘る色しをうかみて此蝶と和せさるんかハ此蝶と
暴さるんやいまの胡蝶ハ又帰りてあ社ハ
蝶なるかを知れとをれを文章物化といひたる楽處と
いふなりと

二　論飯汁辞

桃溪

○神亥月の末木枯さく吹て寒さ
人のわたりつゝ見さやよ行かゝ夕つさ陰しの冬ふ
なりぬるかをいふよ
○為ぶして潮さ指しる時ぬるかの白ぬよ

雪絹人を招もまた奇しくもあるかな
なりけりがんの一杯よりたちなくてそれより
○夏雪まゝ里の雪はけある暁を紅酒の異示関係
と第の書樓のおりむさぞ趙子のいたちなりける
あゝ雪風もなくてどゝ里釈のんよりなぐまぬるさ
なるを飽まそるらひ暖よ出て果き
○昔沐農氏と安へゝ毒乃百の草を甞て
一日よ七十の毒ありとやはる人民のうつき試いや
其うまひかゝゝめんとてうつゝ此毒を試をぬ
はしるゝされを毒の薬のとあやゝくおそろし
さ四かゝゝ玄服よ毒を飾里てうつゝ此人の君又

の毒を初ゝぬきいうなる羅人なりや
○世よ好悪の二つありて飲食ハまして人のなむ物と
おのをハぬまたされハぬむものと美ゝ好まるゝ或
悔むされ能毒の法よハあゝてはよかのてゝかなそ
さ毒ゝの好を揚を思いうるおのゝぬむ毒つゝ也て
常よかへてくんまゝ里ハ天時を双乃勇士なるゝ
さいつ人よるくゝすまし紀淡なるゝ
○千百中よ毒ゝりなるハ常なりと誠よ百中を
逃毒てを独よあゝりなる毒ゝ紀さゝ人の貪食愚ぬへ
○なる人友のゝうへはなつるものを絶てゝ毒よなるゝ
ぬハ素天とりて逃よそくへゝと毒よ詑て扱友の

がり行くよ其日さあやにくよ此酒の一つさへ行くで
行くすゝ酒のことよ酸つておのゝ高へ登るよ此もいで
服するどよまとくあるる風情ありしゝハこも毒やどて其
毒やありとまてうまく変とそゝきくすゝへ人さく
せずして取るこの世やくよ酔ぬるよけゝもゝ記
匂ひよ酔ひ記ありゝゝ家と示いんもすゝ行ゝ
とぞ彼蘭毒よ記といさきようせゝ其人といつれ
○とあまかくなのれ又母よすゝむるの子あんゝ子弁
よあるこの面さ師又あゝんゝ
○はゝさまゝ倫切大拓の妹背と知りゝ記ハ七院
のゝ深ゝもかこるへゝといつよ人怪んて第ゝ人ゝで

此乳味乃立るまゝ拓の例の施施のきはめ
○是非以つまよりあゝん取捨いれれようなのゝん書
して筆紙おおさむ

三　戻吹辞

交播

むゝ虞舜の君に法拓すきよ漢猶の竹と伐りて
戻吹ゝしゝのゝゝ家知ゝと伝へてうさ世あさゞれ竹
戻吹よ家柿舎のゝ拓ゝ弟拓の主似をせゝしゝう
さゝさゝのハ天帝の法にくゝとうけてうたう海すと
勅ゝゝるゝゝあゝ以ゝかの王敦う破和ひよ孫繁
とりてたくゝとゝ怪よかゝ拓のすゝよへ行る其拓

花奈とぬるこの工を出して高野弥右衛門
くるさすがはようぬ女の調度ここそかれりける
かく共素性をくるくの色に用とのすハ皆一也とハ
ほの面の袋子の板ありしかハ罷なくて配所の月とも
申給えれ拙すきなりかしかうかしう罷なりして敵う
ふるすのほのれさよ志ろ虎狼奥州軍う一盃
機嫌のやりとりまつ武義先生迄一せ
無常ハ世をうしほのけられよ面ふ海を
いうなるすくせるやあんん結束の水鶏のこたて表を
すむるよりまを出りよりたうを出て家物不動なる
るたん場共ちいつまこの行ものを共ほ法をて佛の

経よハ世を出ぬ法華りの女ぬよを恐の字百原の
示しをとうや陀羅ぬ老ふたいうるこんを
りてのあのてをもまを恐のなるかしをられハ
うをハこたとて貴てたをたうれ春よをう色塚ハ
成ようこ言の蓋ものを冒ものくほのくあうれかう
御も始る変のさハ春うたれ性のすやさ色ハ
共場出つよたと十九文法りのこを海ハ色こんを
しくへてる麻者あるをうりこたれよあく
より佛の旅も伊度しやう霧嵐猫とかむの袋ハ
ぬくつぬよ嫉貢とをしてあをこのやにれかをさ
めつんせるこて柚流の奥紙ハ初ハ実ようの

紙の紙ぶくろ　ふくろ

四　義論

昔より義とのたまうるたぐひ　いひおきしげさ
よいはんすれば　夢は面影　うつりの如　抑義の沒とは
礼記の云義とは黄帝の花眷　孔子の周公の夢
胡蝶のごとく　相應しいはんすれば　うたがひ
五十年は欲の海　さんとの乃士の幻術　れば
るるとたゝえ　のうるとは　のひゝと義ことさう
廉抹　やがて江帥の舞　吉義　とり
のとゝしるるもゝしき　文智　いはんすれば　さもは

ふ病指面しいるるもれよ　者ゝく義のゝくと　ゝるて
ゝ勝ゝ　ゝ義とくゝり　ゝ至ゝこれもゝりもてる　沒れは
沒れ　ゝ聲　ゝ嗟ゝて　ゝ山　ゝ時は山　ゝ嶮のさう　れとかけ
めゝる義とゝ　ゝ情物志　ゝいゝるゝて　ゝ仕色　ゝるゝ
ゝ　ゝ義の世　ゝ幻のゝ　ゝすゞと　ゝ形みて　ゝる　ゝれさゝ
迷ゝ　ゝいゝ　ゝゝきゝ　ゝのゝん　ゝ義　ゝゝゝむゝ
面ゝ　ゝて人　ゝいゝる　ゝは神　ゝおゝ　ゝりて　ゝれゝ
ゝ　ゝゝく　ゝす用　ゝ思　ゝ難ゝ　ゝ思　ゝ皆　ゝる胸　ゝりゝ　ゝ或
めゝ　ゝは　ゝおゝ　ゝりゝ　ゝゝゝ　ゝかゝ　ゝれ事　ゝれ　ゝゝゝる
ゝ　ゝ收ゝ　ゝ義　ゝ楽　ゝ苦　ゝむゝ　ゝ目　ゝゝく　ゝまゝ
張ゝ　ゝんゝ　ゝゝゝ　ゝゝ　ゝ或は　ゝ一　ゝ一　ゝ城ゝ

あり栄花のまさるを明りなるハ通ゝかるゝ義にて
大和めくりも好き法師ハ食ハ木ハ好きあるを居ハ多の
姿を拾うをまして いひしるべき家のすがたへ
人めの実状はまた 紀の諸の情知りて彩る枕
のおとなるを愛すハ多くて人へすもをまび
やもあんこれゝハ愛弟一の徒しいたん合拾ふ
る姿ゝたよ彩ゝ ふ愛ふんぬも彩ゝ思ふ愛
よんるゝいへどさのふ富さを見てふ茅ふと人べる
人をあたハ程よ寄るとふ色ハこれを知るといふ
りなく思よきゝとうめん嫌よ慕ふ色思も
あゝたなきうふ天ニとふんるもさちそを程の

るを行ゝひハるみぢうよき精のうゝやまゝ 神ん只
それりをくこを色を彩く池塘を茅はすゝいたで
さを面おさ愛ふてはを愛よそさあて具あれハ
思ひねの愛ゝ逆ひふとあゝす愛てふりのを彩める
ゆをとをのわて六味宗人学よ野愛とおりを去る
ゆ完かゝこ模も面てをるおハ玉月ゆるへゝ

雅論

桃溪

おをはうゝよ月ハ張のれとのをふる物かくとを例の
法師の風流おうゝふ言すハはすを言ゝやと猫を
ゝ人をあをハいうで満花をふすゝゝんやゞこゝ

定さらんもむつかしき道ハいさやなあるうに山めぐり
せんとおもひつゝまかりつれてそこらあまた立ならぶる
志をすゝむにはゞ待んの爲なるを七度八度にお参
みて京中の見ものなれるに書なへる緒ハ上野の浅草
かしはしぬけしきの中さずり小家ゝ彼さへ白山中とん
ときめく花のあるに思ひあへす貫さけ尺へ寮りぬる
離のほそてしく居を構さりてこゝとつんぬれしぐ
そこなれ此は岩に入ていづち行きん出とりの松ばこの
以へまなるハ以上の櫻鶴もいろよくひかしすや家の猫
めるゝと知て居切りやしらんかきハ人分家をさき古完に
すみて人の愛子の如く出て倉奥を盗て飼はるゝと

稀しふ貴国のくるあきはのゆかりの星あかるハ蝦夷(エゾ)女此
入ゝ居も見られ多く集りて其形く乃妖をなしぬ
人の為に捕を迎てハこれ猶皮の毒気を吹て人をと
悩ましさせれや秋の目に鼠捕しいへると待るもかりん
悪むへきの類ひしぬかし也とい〳〵ハ又おとりのいへるに鈍の
生しておのをしくる用居用も皆造物若此云ろ稀也
まむし百足の人に害あるすら絶つすいとにし離ハ
させる害もなく梁の様岩巌の完よく通して鼠を
これる固をおゝして血を吸るハ酒呑童子か徒にて上戸の
熟かるもし大敵より小敵おそるしとやかましく読ひを
よませるかりん雑離の火をしらとなし一夜鳴さまよ

凶とをあすと例の杯よりあらうけて火災と逝さ〜むる
なり〜〜鉄人前表をさとしいて〜〜庭の砌よあつまり
いるく附属ふ小女郎と称する色八丈変して右〜
なるをそれ手の孔流かん家よ領主てよく別色
あり〜の書を書ハ八お庭の節義よりやされハ和訓の
論よ到りてハ知へ〜〜一分やちうにしてるゆれ
板の元まなるをとひ〜〜蝶如く通して板よ無のつく
てかりなるハ〜ちと〜いふへるをかり〜尼姫茶話
なるをと又竹の間よ入るれハ反潮して出るぬく者ゑ
まを立ふも例れ自ら生るを賛〜〜いちと例せる
といふをりや其理をあんり〜〜まく去龍の水山

よ流色常よすむと天と天つけるハ月を合し
て天を楽〜まを思へるを絶よハ眼板家の絵の鶏
〜成て怒ら肩よ休せると憤むへ〜をあすをと
戯論もかまひすく〜家を悟むへくを彫く又恐をべう
しあ〜ぬハ多ぬをよ龍を出て〜異せ〜をいを浩ひ
まをなら芳名俗本のめもあやよ深龍のそこ変し
いりあく〜かをうつりゆく人の心花の山をつけハ
年をを武川ゆ〜ぬ〜まづ勝栗毛よあかをん〜和つる
ぞの杯をぞてよ品字まをよ暖かり〜いひ〜を
思ひおさし鼎のかく〜たむろ〜て皆く社鳴よ拾ひ酒着
の具よ入色ハす法楽むへ〜学ちまち初んぬさを

論ハ非ずして古の書籍を見ん事を願ハゝ其
して古と云る其頃ハ廓然太悟すゝんハ悟む
らくゝ日こ如山ようすづけハ人を論ずと云ふ
称ずゝと安んずさゝハ融の自至ると云ふ事ハ
いてゝを示人をゝゝやむへゝしたとおの〳〵第一拙し文を
りつけ是ハ融の論ゝとゝ云へきとゝ

六　猫蔵

文橋

獣ゝる猫と云るゝ猫をゝりおゝ知ハゝ如ゝ世
相を考ゝよおゝまゝちゝゝゝ仲の頃城なりゝゝ格子
さゝ称ずゝさゝ耳をゝゝて料理場乃海老に

因つゝきの書籍癖ゝゝと天帝より雛一羽と小刀
一丈と交切て与ゝかくのゝさゝれゝ是ハいゝたかゝゝ
分仕ゝよゝと奉ゝ人の脉枕ゝ刻て史猫の法寝元
背ゝ是すやゝされゝゝれちゝゝの孫ゝ是ゝゝて大和の虎
ゝゝかゝ猫ゝもいつ是如法ゝまゝゝしりのゝゝ
極めて嵐と名ゝハ嵐ゝゝのむ乃脉法ゝて称ゝと知刀
せるゝゝ拙ゝりの人形作ゝりゝゝ称ゝりを好むゝゝひ
てゝもいゝゝゝ知ゝハゝて牡丹の花ゝ眠る日も
ハ蝶ゝゝゝてゝゝやゝれとんゝ花ゝあゝゝたゝ古人のゝゝあ
ゝ切不ゝて面白ゝ作の叡術の奥妙ゝハ作ゝ作ゝ
ゝ性ゝゝゝゝて女ゝゝ是ゝこゝゝゝゝゝ女ゝの

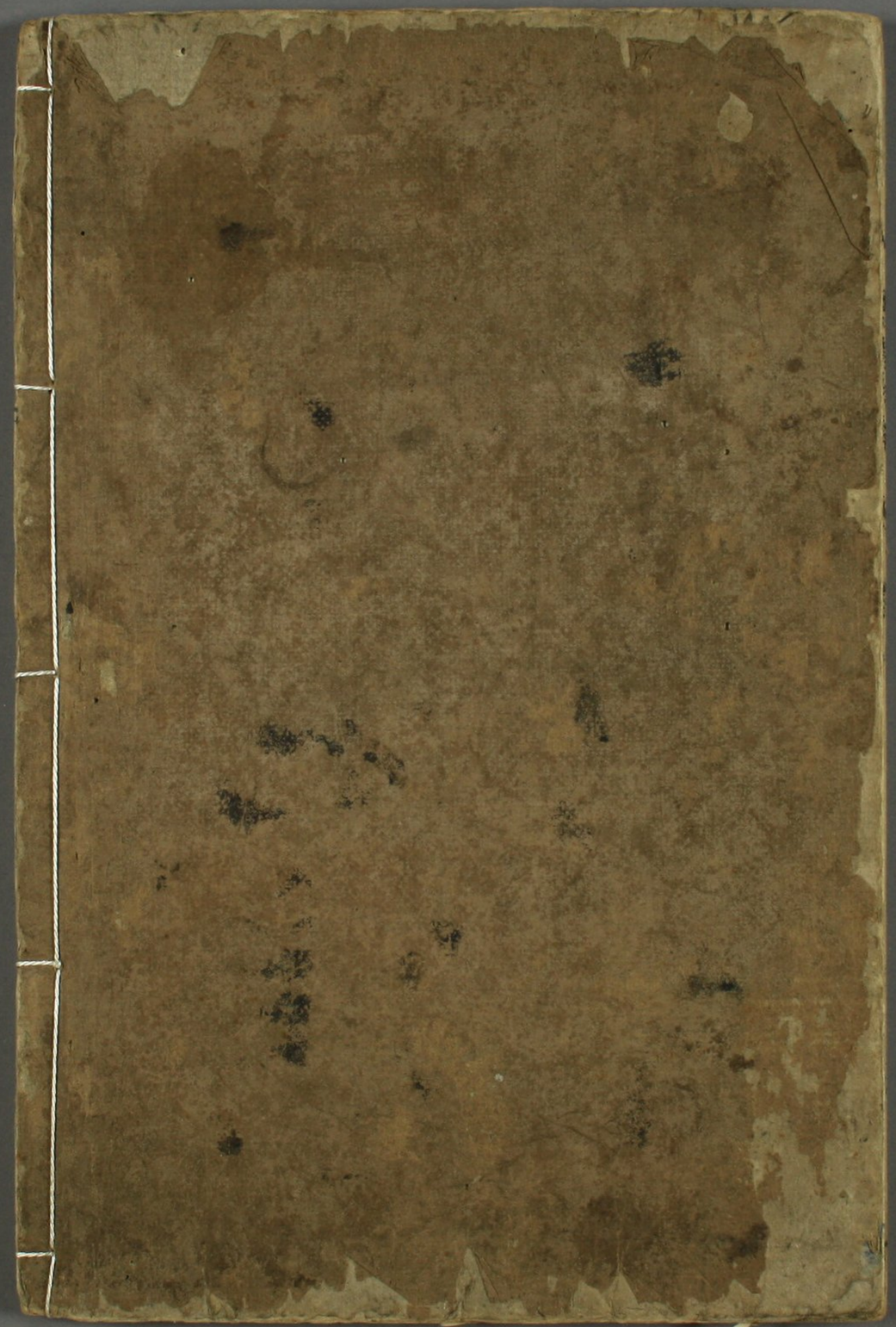
之の猫家屋よハ及ぶ所の媒とをかりぬ其係の因者
よハるれ家婦よかゝつゝれて義まろ動動も悪霧の
ゝかさとおのゝへや彼者紙も云る様のまゝよ宿の絃
つけゝる云はゝ納云る猫すさゝゝ人へゝりされいで其よ
間のむゝ記業間ハよく知つゝんよ知るよ其勇を姫る
ゝよ動りてハ仇のするゝ物貧の変化して
あゝく分の物さすハ獺猴ゝ扇とかゝべる暴ふ
出業一日の暖あ迄ハ瞳ゝよ六時の変相とをめ
計ゝ祭り仇ざゝゝかるゝ人の世其井とちゝす
ゝをかゝて丈舟の勝かるる此ハ世をの云もゝむ時迄
とうやさハ毒迄其麻よまゝりて不彼の関屋の板

庇ようゝれて果ハのゝ猫のたゝるゝと家り赤ゝ越の頃
のゝ法も奥山の移こまゝさ鳴も世よ彼ゝを絶て板の
抜ひるゝゝ九妖と年すゝりのハ狐狸ゝのゝ云ゝふ
乃ゝのゝけ拍子ゝよハ妖を其も交りて人ゆ迄は
云迄乃友よゝるゝいへるゝとさあゝりの戒めゝ法師
法文赤猫ハよく化るゝものゝよいひるゝれてゝへのゝよ
そゞそゝ迄ゝつゝねゝよゝ三線師の店よゝりてなまま
席とゝゝおゝハゝ迄ゝゝゝゝ乳の数とかゝへハ又なゝゝ
調度よゝりゝゝかゝれゝる死ゝゝて其ひゝゝやいへゝ九
三毛ゝゝ云ゝ上の毛ゝに赤ゝゝゝ人ゝ庚毛ゝ早稲のゝゝく
ゝ云ゝるハ猫とかゝて志かゝゝて板猫と知ゝゝる

その云ふかりなるまを丈性の利益とこそいへあれ
毛文よりなる唐きぬこそ出でて金花猫と
いふものありてきたりしをかたすを載せ
さるをばかぶりすなるふ逆とする八名利と
の別をさつ色三十六の仲男を逆色とする八名利と
いふんかんを抑えるを和光塵しむるかりかくいへど
涅槃の書上はまつ初さるる五十二数のまを
恥りかんさハ法色佛の名跡さまもあて唱法の
二ヤンとまれるニヤさ十よかへつてンさをとり
ムの字の色ハを法と泥仏とを義経とを唱へさるを
いきぬハまはるまいまはるまや鞠子（子コ）子とまこ

の西ひとをとり文珠の浄土まを引んもまかくこそ
覚母色ハ世をかの〜す言葉まを極ん〜と八赤毒ハ
世ふ文ありきまを世言と味義の地すさより山りの
う〜へと出ぬ〜ぬとしを世すへて虚まを実ふのそを
文言葉の恒世んの色ハ名りやそでろの色と費
さんりをかきりるまを三縁をいまりめて曰

一　さかりこをを火蛙の間まめ〜〜て三丹の名ハ樂
　う名浴のいきやひとりを引〜くへさ事
一　歌の殿まおそ〜〜わそなる〜ん指月貴す
一　世まんをさ人と仏ものひ猫〜をいへハかりまを

ふるゝ涙ゆゑしらぬ袖のうへ
ものをもうらうらけるあはれ
なるゝ深く猶百の中ねうはぬ
ものとてもけしきの工うら

李撰文選卷之八 一終